

これまで（第1回、第2回）の調査審議内容のまとめ

※ 赤字等は、第2回からの追記

1 主に二学期制の成果として考えられる視点について

子供と触れ合う時間の確保に関する視点

- ・ より授業時数が確保できることによって、先生たちや子供たちにゆとりが生まれ、教育相談の時間など、先生たちが子供たちに対応する時間が多く取られ、関係性も良好に保たれると考えられる。

子供の学力・体力向上に関する視点

- ・ 通知票の作成が1回少なくなることにより、通知票作成に費やす時間を確保する必要がなく、新体力テスト、運動会等の練習や夏休み前の水泳指導などが充実していると考えられる。
- ・ 新体力テスト等のポイントでは、県内上位を維持して~~いる。~~おり、良好な状況を保っていると考えられる。
- ・ 県の学力学習状況調査の調査では、概ね児童生徒の学力の伸び率が県平均を上回っている。おり、良好な状況を保っていると考えられる。

子供たちの安全に関する視点

- ・ 授業時数が確保できていることで小学校では、日没が早くなる時期に~~11月半ばから12月を全学年6時間授業を一部5時間授業で対応することが~~できるため、下校時の安全面への配慮ができていると考えられる。

教職員の職務の質の向上や働き方改革に関する視点

- ・ 通知表や会計処理が1回減るだけでも、教材研究・授業準備の時間が増え、その分子供たちにも授業の充実として還っていくと考えられる。
- ・ 職員に関しては、朝部活動等の関係で7時前に出勤し、夏場では18時まで部活で子供たちを見て、そこから授業準備したり小テストの採点をしたりすることで、帰りが20～21時になっている職員が大勢いる現状がある。12月に通知表作成がないことで、職員にゆとりができており、それが子供に対応する時間に繋がっていると考えられる。
- ・ 「働き方改革」や「教員の業務削減」が叫ばれている昨今の社会情勢において、二学期制による時間の確保で、これらの課題が改善していくと考えられる。

2 二学期制の実施にあたり、一部対応が必要と考えられる視点について

学校の行事等（教育課程）の編成に関する視点

- ・ 学習指導要領が示す教科等の授業時数が増えている中において、学校行事を極端に減らすことなく、特色ある体験活動など、教科等の授業だけでは育成することのできない教育活動が圧倒的に充実していると考えられる。
- ・ 感染症の拡大が懸念される中において、万が一臨時休校を行っても、冬休みや春休みに授業を行う心配をせず、教育課程を編成できると考えられる。
- ・ 三学期制の学校では、特に5月中旬の年度初めの定期テスト（1学期中間テスト）の出題範囲が狭く、生徒の学力をうまく評価できないが、越生中学校で行われる6月の年度初めの定期テスト（前期中間テスト）であれば、十分に評価できると考えられる。
- ・ 定期テストが1回少ないことで、部活動の活動日数を確保できると考えられる。
- ・ 中学校における定期テストの回数が1回減ることで、その分のテストの出題範囲が広がると考えられるが、出題範囲が三学期制の学校に比べて広いのは、6月の年度初めの定期テスト（前期中間テスト）であり、生徒の学力を図るには、適正な出題範囲と考えられる。

（対応）今後もテストの出題範囲が三学期制の学校と比べ若干広くなると考えられる9月の期末テストでは、夏休み前に出題範囲を示し、計画的にテスト勉強取り組めるようにする。

私立高校入試の相談会に参加する際の資料が不足することに関する視点

- ・ 8月中に確約といわれるような相談ができないと不安が生じるが、10月中旬に通知表がもたらした段階で相談会に行くことで十分間に合うと考えられる。
- ・ 夏休みの相談会では、通知表を提示することができず、通知表を提示できた場合と比べて不利なのではないかと不安を抱くことが考えられる。
- ・ 夏休み前に通知票が出ないことで受験校に向けた指針が立てにくいと考えられる。

（対応）今後も夏休み前成績表を配布し、参考資料として高校に持参し提示できるようにする。また、二学期制を実施する中学校の生徒が私立高校に入学することについて不利益が生じないために私立高校と中学校とで共通理解を図る。

（対応）学期制関係なく、進路に関して保護者の心配はあると思うが、できるだけ早く進路を決めることのデメリットもあるため、今後も担任との面談を充実させ目標をもって受験勉強が行われるよう、しっかりと受験校を決定させていく。また、今後も私立高校や保護者の要望があれば対応していく。

学期や長期休業前の切り替えに子供たちが目標をもって取り組むための視点

- ・ 前期、後期の切り替えが難しいと考えられる。
- ・ 子供たちが、夏休み前に通知表がもらえないため、目標をもって夏休みを過ごせないと考えられる。
- ・ 夏休み前に通知表がもらえないことで、けじめがつかない、通知表があった方が目標をもって夏休みを過ごしやすいかもしいないが、これらの課題については、家庭での取り組み方で対応できると考えられる。

(対応) 今後も夏休み前成績表の配布や夏休み前までにを行ったテスト結果等を示し、夏休みの前の子供たちや保護者との面談を充実させ、夏休み前までにを行ったテスト結果等を保護者にも提示し、課題を共有して目標を持たせる。

二学期制の実施について、これまでの成果等を広く知ってもらう視点

- ・ 越生町が実施している二学期制のことを全面的に特色として出し、越生町の小・中学校に通わせたいと思う人が出るくらい成果をアピールすることが必要であると考えられる。

(対応) 新たに小中学校に入学する保護者にこれまでの二学期制の実施内容や成果を就学時健康診断、入学式、保護者会、広報おごせへの掲載等の機会をとってお知らせし、理解をいただく。また、町民に対しても二学期制継続検証委員会の調査審議の内容を越生町のホームページなどで広報していく。

(対応) 今後の社会的背景等を鑑み、今後も議論が必要である。また、今ある二学期制をより充実させていく必要があると考えられる。

3 アンケートを実施することについて

実施すべきという考えについて

- ・ 実態を調査するために児童生徒や卒業生の保護者を含みアンケートを実施すべきと考えられる。
- ・ これまでの学校評価等では、三学期制への要望もある。少数であるが、落とさずに議論すべきであると考えられる。

実施する必要はないという考えについて

- ・ 在籍の児童生徒へのアンケートは容易であるが、地域等へのアンケートは、周知配布等の課題があり、公平性に欠けると考えられる。
- ・ 調査の目的の説明、児童生徒の発達段階を考慮すると実施は困難と考えられる。調査方法によっては、今の二学期制の良さを欠く可能性があると考えられる。
- ・ 本検証委員会は、学校関係者、地域、有識者等の代表としての委員会であるので、本会の意見は重要であると思われる。したがって本会の答申で十分であると考えられる。

アンケートの実施についての方向性

- ・ アンケートを実施すべきという意見がある一方で、調査の目的の周知等課題が多く、公平性を保つことが非常に困難であるということから、現時点では、実施を見送る方向性の意見が大半を占めたと考えられる。